

特集

もうひとつの「びんのリユース&リサイクル」

通常、あきびんは洗って再使用されるか、びんの原料などに再利用されますが、暮らしの中で保存容器として使われたり、工芸品などに加工されたり、もうひとつの「びんのリユース&リサイクル」も広がっています。

「びん to びん」のリサイクル以外にも、ガラスならではの特性を活かして幅広く再利用。

「容器包装リサイクル法」では、あきびんを分別収集する際に、少なくとも無色・茶色・その他の色に分けるように定められていますが、無色と茶色のほとんどはびんの原料として、その他の色の一部はびん以外の用途に利用されています。ガラスびんリサイクルの基本は、新しいびんの原料にする「びん to びん」ですが、再利用しにくい色調のびんや製びん工場から離れた地域で排出されるびんなどについては、それ以外の用途が求められます。

びんの原料以外の主な用途は、砂の代替品として利用される路盤材や埋戻材、住宅などの断熱材として利用されるガラス短繊維、土壌改良材などに利用される軽量発泡骨材などです。天然素材でつくられるガラスならではの特性を活かすことにより、幅広く再利用されています。



▲断熱材



▲カラー舗装



▲貯留浸透工事



▲軽量発泡骨材

■あきびんの他用途利用例

<http://www.glass-recycle-as.gr.jp/gover/index3.html>

限りない可能性を持っているあきびん。
エコの気持ちを大切に生み出した楽しい用途。

暮らしの中で、あきびんの使われ方は様々です。優れた密封性を利用して食材や調味料を保存したり、美しさや透明性を利用してお気に入りの小物を保管したり、中身を替えて再び容器として利用されることもあります。あきびんの中で船の模型をつくる「ボトルシップ」、あきびんを溶かしてつくる「琉球ガラス」などは、まさに、あきびんの工夫された使われ方です。

今回の「びんの3R通信」では、通常の「びんのリユース&リサイクル」の流れとは異なる、あきびんの使われ方をご紹介します。あきびんキャンドル、リサイクルガラス風鈴、フラワーボトル、あきびんミュージックは、いずれもエコの気持ちを大切に生み出した楽しい用途。東日本大震災により節電を余儀なくされたこの夏に、心癒されるあきびんの世界です。



■あきびんの工夫された使われ方

<http://www.glass-recycle-as.gr.jp/consumer/index3.html>

あきびんの工夫した使われ方



あきびんキャンドル

キャンドルナイト徳島

市内の幼稚園と小学校から約4000本のあきびんを収集。びんにみんなが手をつないでいる絵をペイント。



2003年にスタートした「100万人のキャンドルナイト」は、夏至と冬至の夜に一齐に電気を消して、ろうそくの灯りのもとで環境について考えようというもの。徳島市の商店街では有志が呼びかけ、2007年の夏至に初めてキャンドルナイトが開催されました。

2008年の夏至には、環境活動にふさわしいあきびんをキャンドルホルダーにしようと、市内の幼稚園と小学校にお願いして、約4000本のあきびんを収集。翌年には、大人たちが大切にびんを使い続けていることを、こどもたちに理解してもらうために、びんを一旦返却。こどもたちの参加意識を高めようと、びんに絵を描いてもらいました。ペイントのテーマは「輪をつくること」。描か



▲キャンドルづくりのワークショップ



▲つながりをイメージしたペイント

れたのは手を広げた人や動物の絵で、横に並べると手をつないでいるイメージが広がります。

●キャンドルナイト徳島：<http://candle-night-tokushima.org/> 取材協力：キャンドルナイト徳島実行委員会代表 長谷川友紀さん

環境についてひとりひとりが考えるキャンドルナイト。徳島市の商店街ではキャンドルホルダーにあきびんを使用。

商店街の店舗に100円募金びんを設置。キャンドルの制作費、すだちと金柑の購入費に。

あきびんをキャンドルホルダーにしたのは、環境への配慮や経費の節約に加えて、収集することにより多くの市民に、この取り組みを知ってもらいたかったからでした。あきびんにペイントされた絵には、環境に対するひとりひとりの小さな力がつながって、輪が大きく広がっていくことへの願いが込められています。

また2009年のキャンドルナイトでは、商店街の協力店舗に100円募金びんを設置。寄付されたお金のうち、10円分でキャンドルを制作して、残りの90円分ですだちと金柑の木を購入して公園に植樹しました。緑を増やすことでCO₂の削減にもつながり、徳島の特産物のアピールにも役立つとのこと。

2011年6月22日、今年の夏至も徳島市の商店街ではキャンドルナイトを開催。多くのあきびんキャンドルに火が灯されました。



▲2011年夏至のキャンドルナイト



▲100円募金びん

リサイクルガラス風鈴

河内風鈴

チリリンツと涼やかな音色を響かせる河内風鈴。材料はお酒や化粧品のあきびんをリサイクル。

一つずつ吹き上げる河内風鈴は、まさに一点もの。大きさや形、装飾の凹凸により作りだされる多彩な音色。



ものづくりの街、東大阪で、2000年4月よりあきびんを原料にした河内風鈴をつくり続ける菅二彌(かん・つぎひろ)さん。風鈴づくりのきっかけは、倉敷の芸大でガラス工芸を学び、リサイクルガラスの作品をつくっている娘さんに触発されてとのこと。風鈴のベース部分は、お酒のディスカウントショップから調達した透明のソーダびんを、窯で溶かして

吹いています。また装飾の凹凸は、近所で集めた様々な色びんを、ハンマーとコーヒーマルで細かく砕いて溶着。鳴子はびん口をスライスして利用しています。

ベル形あり、釣鐘形あり、一つずつ吹き上げる河内風鈴は、世界に二つとない、まさに一点もの。大きさや形、装飾の凹凸により、音色が異なります。一齐に鳴ってもうるさく感じないのは、多彩な音色がハーモニーを奏でているように聴こえるためだそうです。



▲びんの口部を輪切りにした鳴子



▲風鈴の原料になるソーダびん

厄除け、故人をしのぶ音色として重宝される風鈴。涼やかな癒しの音色を、東北の被災地の避難所へ。

菅さんの風鈴をつくるのは、毎年9月から5月までの9箇月。その間に吹きガラスの体験も受け入れています。残りの3箇月は、河内風鈴を紹介しながら、各地を販売してまわります。風鈴以外にも、酒器や花器なども手掛けています。またガラスの印材を作成し、小学生にハンコづくりの体験も実施。いずれもリサイクルガラスで、年に約1200本のあきびんを集めて利用しています。

夏の風物詩だけでなく、災いからの厄除けとしても重宝される風鈴ですが、東北地方では、亡くなった人をしのぶために軒下に風鈴をつるす習慣があります。それを知った菅さんは、風鈴の涼しい響きで、東日本大震災の被災者の心を癒そうと、4月初旬に、岩手県宮古市と宮城県石巻市へ向かう友人に河内風鈴を託し、避難所に届けました。



▲あきびんでつくった印材



▲小学生がつくったハンコ



▲風鈴を吹く菅さん

●河内風鈴<http://kawatifuurin.at.webry.info> 取材協力：河内風鈴 菅二彌さん



フラワーボトル

日本フラワーボトル協会

フラワーボトル誕生のきっかけは、「このびんに花を咲かせたい」という高校生の一言。



びんの中に美しい花を咲かせるフラワーボトルが誕生したのは15年ほど前。きっかけは、ある農業高校の授業で、学校周辺の環境整備をするため、あきびんなどを回収している時に

高校生が発した一言、「このびんに花を咲かせたい」でした。

そんなアイデアから、農業高校の教師が実際にフラワーボトルをつくり、その魅力を伝える本を制作。日本フラワーボトル協会が設立され、新聞や雑誌、テレビなどでも紹介され全国に広まってきました。現在は約160人の認定講師のもと、こどもからお年寄りまで多くの人が、フラワーボトルを楽しんでいます。

作りやすいのは、花を入れやすい広口びんですが、醍醐味は細口で首の長いびんにあり、満足度が違うと言います。いずれにしても、フラワーボトルづくりの奥は深いことは確かなようです。



▲フラワーボトルの作品

**作って、飾って、観て、楽しいフラワーボトル。
あきびんの中に、思い出の花を色鮮やかに封じ込める。**

**びんの中で生き生き咲き続ける不思議な花。
そこに活かされるびんならではの密封性と透明感。**

フラワーボトルの作り方は簡単。まずは、新鮮な花とお気に入りのあきびんを用意し、花を束にしてびんの口からそっと中に入れます。中に入った花束は、細いスティックで向きなどを調整。アレンジが終わると、花を崩さないようにシリカゲルを注ぎ込みます。密封して1週間後、そこにはすっかりドライになった花が咲き誇っています。あとは、リボンなどでラッピングして完成です。

フラワーボトルの魅力は、色鮮やかな花がびんの中で生き生きと咲き続けることで、びんならではの密封性や透明感が活かされています。そこには、庭で咲いた花や、贈り物の花、記念の花などを、そのままの姿でびんの中に封じ込める喜びがあります。

協会では、保育園や老人ホームなどに向け、フラワーボトルを通して物を大切にすることを、広く伝えていきたいと考えています。



▲フラワーボトル教室



▲日本ホビーショーに出展

●日本フラワーボトル協会：<http://www.j-fba.com/index.htm>

取材協力：日本フラワーボトル協会代表 新屋美津子さんとフラワーボトル教室の皆さん

あきびんミュージック

ピン笛合奏団 La マーズ

**ピン笛を吹き続けて10年以上。
3人のチームワークは体内リズムで音を合わせる。**



ピン笛合奏団Laマーズが結成されたのは、2000年の秋。若者の街、高円寺のカフェに集う仲間が、音楽で何かおもしろいことをしようと、飛びついたのがピン笛でした。

大小様々なあきびんに音階をつけて吹くピン笛は、メンバーが音のパートを分け合って演奏します。当初、少ない人数だと息が続かないこともあり、6~8人で活動を展開。童謡、アニメソング、ジャズ、ポサノバなど、あらゆるジャンルの曲に挑戦し、自主企画ライブの他、幼稚園や高齢者施設などのレクリエーションにゲストとして出演したり、小学校の授業の講師としても演奏しました。

その後、音数を減らしながらメロディを伝える演奏を追求し、現在は3人編成で活動中。まさに息もぴったりで、メンバーそれぞれの心にある体内リズムを合わせて、演奏しています。



▲片手に5本のピン笛

**楽器は一升びんからミニチュアびんまで多種多様なあきびん。
3人合わせて20本から25本のびんを持ってピン笛を演奏。**

**心に沁み入るピン笛のやさしい音色を、
東北の被災地のこどもたちに聴かせたい!**

2006年には、当促進協議会のホームページ「びんのリサイクル教室」でピン笛合奏団Laマーズの演奏を紹介。これをきっかけに、2008年にレコード会社よりCDを発売し、メジャーデビューを果たします。その後はラジオやテレビの出演が続き、雑誌や新聞にも採り上げられ、イベントにも参加し、ピン笛の可能性を広げてきました。

ピン笛の魅力は、ガラスびんならではの温もりのあるやさしい音色。その音色に、0歳の赤ちゃんは目を見開いてピン笛に聴き入ったり、1~2歳の赤ちゃんはリズムに合わせて踊り出したり、気持ちよさそうに眠ってしまったりすると言います。

「ピン笛の音色は赤ちゃんからお年寄りまで楽しんでもらえる」と確信しているピン笛合奏団Laマーズは、現在、東北の被災地のこどもたちに、ピン笛の生の音を届けたいと、準備を進めています。



▲ピン笛を演奏するLaマーズ



▲キッズサイト「びんの大合奏」

●Laマーズ：<http://la-mars.com/> ●当促進協議会のキッズサイト「びんの大合奏」：<http://www.glass-recycle-as.gr.jp/child/06.html>

取材協力：ピン笛合奏団 Laマーズ(ナメコさん、リカさん、サチさん)



第15回通常総会を開催。事業報告・決算報告 ならびに事業計画・収支予算が承認されました。

去る6月21日、日本ガラス工業センターの会議室において、ガラスびんリサイクル促進協議会の第15回通常総会を開催しました。当日は会員会社の代表が出席し、平成22年度事業報告(案)・決算報告(案)と平成23年度事業計画(案)・収支予算(案)について審議され、いずれも承認されました。

また新会長には丸橋吉次(東洋ガラス株式会社 代表取締役社長)、新副会長には大西貞明(磯矢硝子工業株式会社 取締役副社長)が就任いたしました。



■平成23年度事業計画■

1. Reduce対策

- ①ガラスびん軽量化事例の収集と効果的な広報
- ②2015年に向けたガラスびんの軽量化実績のフォロー

2. Reuse対策

- ①「リターナブルびん利用実証モデル事業」と連携した全国特定地区でのガラスびんリユースシステムの強化
- ②「リターナブルびんポータルサイト」の鮮度維持と参加企業の拡大による効果的な広報
- ③関係他団体と連携したガラスびんリユース促進に向けた課題整理と対応策の検討・実行
- ④ガラスびんリユースシステムの普及・促進に向けた全国的推進組織の立上げ検討への参画

3. Recycle対策

- ①カレット回収量拡大施策の検討実施
- ②自治体への個別アプローチ展開によるカレット回収量の拡大
- ③その他用途事例の情報収集・他用途業者との定期情報交換と、ホームページを通じた情報発信
- ④カレット品質向上に向けた啓発情報の継続的な発信

4. 広報対策

- ①小中学生を対象とした「エコな容器 ガラスびん・ポスターコンクール」の展開
- ②ホームページ(消費者)掲載項目の充実
- ③エコプロダクツ2011を始めとしたイベントにおける「ガラスびんの3R」に関する直接広報活動の実施
- ④効果的なノベルティ品(限定使用タイプ)の開発：2010年開発ペンギンシールとの併用
- ⑤自治体との連携強化による情報発信と情報収集の拠点づくり

5. その他の対策

- ①会員の新規獲得活動
- ②業界紙を通じた広報活動の強化
- ③ポトラー正会員向けガラスびん研修会の実施

ガラスびんの魅力を引き出しながら、3R推進の 取組みをさらに深化させてまいります。

ガラスびんリサイクル促進協議会
会長 丸橋 吉次



この度、第15回通常総会(6月21日開催)にて、会長に選出されました丸橋でございます。就任にあたりまして、ひと言ご挨拶を申し上げます。

当促進協議会では、ガラスびん3R推進「第一次自主行動計画」を2006年3月に公表してから5年が経過した本年、これまでの成果等を踏まえ、2015年度を目標年次とした「第二次自主行動計画」を発表させていただきました。今まで展開してきたガラスびんの3R推進に関する様々な取組みを、さらに深化させた内容を掲げており、その実現のためには、国・自治体・消費者の皆様との連携・協力の重要度が増す増しております。

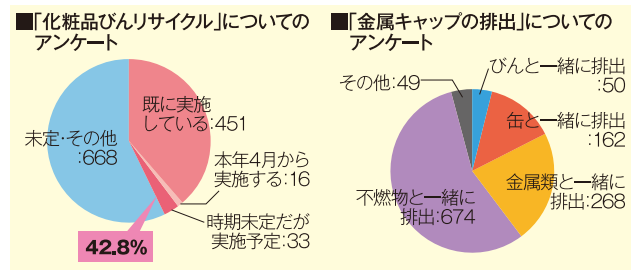
ご承知のとおり、容器包装リサイクル法の5年ごとの見直しに向けた審議も想定される中、事業者のガラスびん3Rの取組みを効果的にアピールしていく必要があります。平成23年度の事業計画につきましては、本「24号」に記載させて頂いておりますが、公益財団法人日本容器包装リサイクル協会をはじめ、会員各社のご協力を得ながら、効果的な事業展開をはかりたく、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「化粧品びんリサイクル」と「金属キャップ排出」について、 全国の自治体に4回目のアンケート調査を実施。

2008年から実施している「化粧品びんリサイクル」を推進するために、本年も各自治体の実施状況の進捗把握のために、全国の自治体にアンケートを実施しました。また、住民への金属キャップの排出指導についても調査項目に加えました。

今年は全国1,750の全自治体へのアンケート送付に対し、1,168自治体から回答(回答率66.8%)がありました。平成23年3月時点で、化粧品びんの実施済み自治体は451自治体と、昨年より27市町村の増加になりました。また、4月より実施及び実施検討中の自治体をあわせると、回答自治体の42.8%で昨年より1.5%増加しました。

一方、金属キャップの排出指導・回収方法では、不燃物として排出指導との回答が56.0%を占め、金属類としての排出(22.3%)や缶としての排出(13.5%)を大きく上回りました。



※いずれのアンケートも、一部自治体の重複回答・未回答があり、合計回答数が回答自治体数と一致していません。

■平成23年化粧品びんリサイクルのアンケート結果報告
http://www.glass-recycle-as.gr.jp/news_rerease/data/result_q23.pdf